

鶴の湯

変化の時代を乗り切る

現在は息子に経営を譲って会長職を務めている佐藤和志さんは、鶴の湯の15代目経営者でした。

とはいえ、この旅館を切り盛りする家系としてはまだ2代目です。実は、和志さんの父・佐藤五郎さん

は、鶴の湯を引き継ぐ前は地元の別の旅館を経営していました。「最初の旅館は、維持費と修繕費

を払えば父が経営できるという取り決めでした。ところが、10年目に事故があり、建物が全焼してしま

いました。父は2年かけてその場所を再建し、再び経営を軌道に乗せました」と和志さんは言います。

五郎さんの経営があまりにうまくいったため、旅館のオーナーは旅館を自らの経営下に戻すことに

決め、五郎さんを放り出しました。近隣で新たなチャンスを求めている五郎さんは、鶴の湯のオーナー

だった羽川健治郎さんに相談しました。当時五郎さんは投資費用を持ち合わせていなかったものの、

共有名義で鶴の湯を経営することを提案しました。最終的に、羽川さんは五郎さんに宿を完全に譲

り渡しました。

これが、鶴の湯がまだ今ほど世間に知られていなかった1981年のことです。鶴の湯は、乳頭温泉郷

の中で最も田沢湖に近いので、この地域の7つの湯治場の中でもっともアクセスしやすい温泉として

古くから栄えていました。1966年、新しい道路が整備されるに伴って、乳頭温泉郷には、厚生省運

営の安価に利用できる保養所「国民休暇村」が建設されました。交通の便が良くなったため、鶴の

湯をはじめとする乳頭温泉郷の人気は高まりました。

その一方で、鶴の湯を何世紀にもわたって支えてきた自炊型の湯治モデル離れが進んでいました。

1980 年代のバブル経済が勢いを増すにつれ、療養を目的とした自炊しながらの慎ましい休暇への需要は減少し、純粋に温泉を楽しむために訪れる人が増えていきました。

「私がここで宿を開いた頃でさえ、湯治のために長期滞在されるのはかなり年配の方々でした」と和志さんは言います。「ライフスタイルが変わりました。肉体労働の割合も減っています。現在の人々は、休息と充電を求めている昔の農民とは違います」

1980 年、佐藤家が鶴の湯を引き継いだ当時、この宿には電話も水道も電気も通っていませんでした。和志さんは父・五郎さんと、この宿の古い歴史と趣を大切にしつつ、地元の農民のための質素な自炊式の湯治宿から観光客向けの旅館への転換を成し遂げました。見事な混浴風呂を最大のウリとしつつ、かつての自炊棟も今でも利用されています。